

渋沢栄一に学ぶ

園長 児嶋 草次郎

今年も残すところ1か月を切りました。思い返せば、散々な1年でした。戦後75年、石井記念友愛社にとっても、昭和20年に石井記念の事業として児童福祉事業を再開して75年の節目であり、職員・子供たち共々記念となるイベントを何かやりたかったのですが、収穫感謝祭や石井十次セミナー等例年行っている行事さえも、コロナ感染症の拡散防止のため中止にせざるを得ませんでしたので、あきらめました。

コロナ感染症は、1年前の12月に中国武漢で確認されてから、世界中に感染拡大し続けています。12月7日付の地元宮崎日日新聞では、世界で6656万人が感染し、152万人以上が亡くなったそうです。新聞の示す表には米国累積感染者1458万人超、インド964万人、ブラジル657万人、ロシア241万人フランス233万人等と記入してありました。「パンデミック」（世界的大流行）などという言葉、まさか自分が生きている間に日常的に使うようになるとは予想もしませんでした。

世界に比べると、我が日本はまだ抑制されている方（12月7日現在で累積感染者16万3800人死亡者2372人）なのかもしれませんが、先ほど書きましたように感染防止のため“三密”を避けるという目的で、多くの行事・イベントができなくなったり行動範囲が制限されたりして、互いにストレスがかなりたまった1年となっています。このところ第3波がやって来ており、溜息をつきながら日々を送っているというのが現実です。ただそういう状況下でも、子供たちが成長してくれているのは救いです。一方、宮崎では、11月末より鶏インフルエンザが、日向市・都農町・都城市・小林市と次々と養鶏場を襲っており、万単位のニワトリが次々に殺処分されていていきます。「四時行なわれ、百物生ず。天何をか言うや。」と孔子は言われましたけど、これらの兆候は、明らかに、天が我々人間に何かを忠告しようとしているように感じられてなりません。

さて、今回は、渋沢栄一について書かせていただきます。「ゆうあい通信10月号」で渋沢栄一について少しだけ触れましたが、この際、子供たちのために少しまとめておこうと思いついたのです。渋沢栄一の人生から、我々は多くを学び取ることができます。「ゆうあい通信10月号」で紹介させていただきました「月刊福祉10月号」には、まず次のように書かせていただきました。

「石井十次が創設した岡山孤児院は、後援会（賛助会員）を組織して資金集めをしたが、その会員名簿の中に渋沢栄一の家族（武之助、秀雄、正雄、愛子）の名前が並び（自分の子供まで会員に入れるのはまれである）」云々。

実はこの4名の子供は、後妻（兼子）との間に生まれた子供でした。先妻千代との間には、別に歌子、琴子、篤二の3名の子供がいたのです。千代は明治15年に亡くなっており、次の年に渋沢は再婚しています。私の根拠とした会員名簿（賛助員芳名録）は明治34年版であり、その時点で上3名はすでに結婚しており、ややこしくなるので、「月刊福祉」では省かせていただいたのです。この名簿には、穂積歌子、坂谷芳郎（琴子の夫）、渋沢篤二・敦子の名前で

載っていました。さらに、男爵夫人渋沢兼子の名前ももちろん見られました。

なぜ徹底して我が子たちを賛助会員に入れたのか。興味が湧いてきます。おそらくきっかけとなったのが、明治32年5月14日の渋沢邸での岡山孤児院少年音楽隊の演奏会です。この時は満を持しての上京であり、まず徳富蘇峰や原胤昭（たねあき）等を訪問し、相談しながら支援者の方々への挨拶回りをします。そして最初の演奏会場になったのが「青年会館」（5月5日）。およそ800人が集まっています。石井十次日記に次のように記録。

「之れ東京に於ける運動死活の分かるる激戦にてありき。然るに天人の冥助は吾軍隊の上に著しく加わり実に十二分の勝利にてありき」（5月5日）。この時は徳富が挨拶をし、石井も「無上の満足と栄誉」を感じています。その後、「出獄人保護会」（5月8日）、「東京市養育院」（5月9日）で演奏。

5月11日には原胤昭氏と共に渋沢栄一を訪問。「昼食をよばれゆっくり談話」（石井日記）。そして5月14日の渋沢邸での演奏会が決まったのです。「談話」は盛り上がったことでしょう。

その後も演奏会は続きます。銀座会館（5月11日）、大隈重信邸（5月16日）、華族会館（5月20日）、樺山文部大臣邸（5月21日）。

渋沢邸での演奏会はどうであったのか。「岡山孤児院新報」には次のように記されてあります。「渋沢栄一氏の邸に招かれ同邸にて氏の親戚知友凡（おおよそ）五十名の為め音楽幻灯会を開き会後吾等一同来客と共に立食の響応に預（あずか）りたり」。

おそらく、この50名の中に、渋沢栄一はもちろん家族みんながいたのでしょう。この時の感動が、みんなを賛助会員に入れる動機になったと私は見えています。その後の公爵、伯爵等の居並ぶ華族会館での演奏会の時の記述（岡山孤児院新報）の中に次のような文が見られます。

「惻隱（そくいん）の情に堪（た）えず泣を抑へて謹聴せらるるを見受れたり」。「惻隱の情」だけで我が子たちまで会員に入れようと思うだろうか。石井十次の教育に共鳴する以外に、何かがあったのだろうと思うのです。

私は勝手に、長男篤二の問題が関係しているのだろうと想像しています。地位も名誉も財産も手に入れ、世間からは成功者として羨望の眼差しで見られる存在になっていた渋沢栄一にも、悩みが一つあったのです。

ここで子供たちのために、渋沢栄一という人について、簡単にまとめておきます。

天保11年（1840年）2月13日、現在の埼玉県深谷市の一農家の長男として誕生。父市郎右衛門は働き者で商業の才もあり、特に藍染の原料となる藍玉の製造販売で財を築いていきました。母の栄（えい）は情け深く、人が困っているのを黙って見ていられない性分で、病人や貧困者を色々と助けてあげたそうです。石井十次にしても福沢諭吉にしてもそうですが、母親の慈悲深さというのは、子供の感性を豊かなものにするようです。栄一の才は父親によって、情は母親によって養われたのでしょう。

もちろん小さな時から父の農業を手伝いました。「下肥（しもごえ）もかつぎ、縄も縄（な）い、ワラジも作り、蚕（かいこ）も飼い、藍も扱った。」と「父渋沢栄一」（渋沢秀雄）には書いてあります。藍の買付には親に付いていたりしていたので、14歳頃には、自分一人でも村々を回って、安く仕入れることができるようになったとか。

父親は教育にも熱心で、7歳の頃から論語を中心とした四書五経等を学ばせます。素読が中心です。栄一は「非常に物覚えの良い」少年で、どんどん暗唱できるようになったそうです。後に大成して、「余は青年時代から儒道に志し、しかして孔孟の教えは余が一生を貫いての指

導者であった」、「余は論語をもって商売上の『バイブル』となし、孔子の道以外には一步も出まいと努めて来た。」（「論語と算術」渋沢栄一）と書いていますが、少年時代の学びが血となり肉となっていたのでしょうか。

ペリーの黒船が来航したのが 1853 年、栄一が 13 歳の時です。世の中は江戸幕府の滅亡に向けて動乱し始めるのですが、吉田松陰等学徳識見のある若者たちがそうであったように、彼も尊王攘夷（そののうじょうい）に燃えて、お城の乗っ取りなども計画します。しかし、徳川慶喜（よしのぶ）の家来、平岡円四郎という武士に出会ったことから、運命は 180 度転換。農民出の志士が体制側の家来になってしまったのです。1864 年、25 歳の時です。1864 年と言えば、京都の三条池田屋で尊攘派の志士が新選組に襲われた年です。第一次長州征代もあった年で、世の中は騒然としていました。ちなみに石井十次が生まれたのは次の年 1865 年です。

命をかけるほどの志をどうして逆転させることができたのか。「父渋沢栄一」の中では次のように説明してあります。

「ここで仕官するのは、まさに一石二鳥だ。それに倒幕運動にしても一つ橋家臣として、徳川の内部から働きかける道があるに相違ない」。目先のことではなく、遠い未来を見つめる感性を栄一は持っていたということなのでしょう。ここへんが凡人と傑物との違いです。論語にも「遠き慮（おもんぱか）り無ければ、必ず近き憂い有り」とあります。当時、目先の攘夷論に感情的に振り回されて、多くの若者が命を落としていっています。必要なのは、やはり世の中を俯瞰（ふかん）する目です。

天も味方するようになります。徳川慶喜の弟徳川昭武（14 歳）がパリの世界万国博覧会に派遣されることになり、お供する侍の一人に選ばれたのです。まさに、晴天の霹靂（へきれき）。「彼はその場ですぐ随行を引き受けた」と「父渋沢栄一」にはあります。28 歳の時です。心境としては「天命は、人間がこれを意識しても将た意識しなくっても、四季が順当に行われて行くように、百事百物の間に行われてゆくものたるを覚り、これに対する恭、敬、信をもってせねばならぬものだ」（「論語と算術」）でしょう。

チョンマゲ帯刀姿でフランスのパリへ行って、彼はその高度な文明に衝撃を受けます。親族へあてた手紙の一部を「父渋沢栄一」は次のように紹介しています。

「西洋の開化文明は、聞いていたより数等上で、驚き入ることばかりです。」「私の考えでは、結局外国に深く接して長ずる点を学び取り、わが国のためにするほかはなく、以前の考えとは反対のようですが、いまさら日本が孤立することなど思いもありません」。フランス・ヨーロッパ滞在は、1 年半に及びました。

実は、栄一は、1858 年に尾高千代と結婚しています。栄一は 18 歳、千代 17 歳の時です。間もなく長女歌子が誕生しますが、「攘夷」で走り回ったり、徳川の家来になってあちこち派遣されたり、またヨーロッパに随行したりで、ほとんど埼玉の実家には帰らなかったようです。ヨーロッパより帰って、6 年ぶりの一家団欒（だんらん）となります。時代も行く前とは全く変わっており、江戸幕府も倒れ、明治天皇が即位して明治と改元されていました。

後に「日本資本主義の父」と称されるようになる、八面六臂（はちめんろっぴ）の活躍がいよいよこれから始まります。フランス・ヨーロッパで学んだ政治・経済・文化を日本に植えつけ育て始めるのです。

まず、静岡で隠遁（いんとん）している徳川慶喜に恩は感じながらも直接仕えるのはやめて、自分で殖産事業を始めます。商人等から資金を集める今で言う株式会社「商法会所」を設立したのです（明治 2 年）。「主な業務は商品担保の貸し付け、定期、当座預金、米穀、肥料の販売、製茶養蚕への融資など」（「渋沢家三代」佐野真一）。

この頃になってようやく妻子を静岡に呼び寄せ水入らずの家庭生活が始まったようです。

しかし、時代は栄一にまだその事業や家庭に埋没することを許しませんでした。大蔵省の事務次官であった大隈重信に説得され、大蔵省で働くことになったのです。明治2年(1869年)、まだ30歳です。

大蔵省では「改正掛」というプロジェクトチームを結成し、「徹夜続きの激務であったが、新日本の国づくりに若い情熱を燃やした」(「渋沢栄一」今井博昭)ようです。そして、「度量衡の改正や廃藩置県、地租改正、国立銀行条例、郵便制度の創設、富岡製糸場の建設、貨幣制度の改正、鉄道の敷設、諸官庁の建設などの実施に向けた企画や提案、調査」(「同上」)を行うなど、次々と結果を出していきました。

そして天は、次にほんとうに活躍する舞台を用意します。大蔵卿(大臣)の大久保利通と対立したのを機に、官僚から脱皮し、彼のほんとうの夢である日本の殖産興業を発展させるための民間の世界へと転身するのです。明治6年(1873年)、まだ若き34歳の時です。

第一国立銀行(日本初の株式会社による民間銀行)を設立し、その融資により、次々と新たな会社を生み出していきます。これから先については省略しますが、「渋沢家三代」には、次のように紹介してありました。

「栄一が九十一年の生涯に携わった事業は、実業分野が(略)五百あまり、社会福祉、教育などの社会公共事業が六百余、合わせて一千有余の事業を創設・主幹しあるいは後援・賛助してきたという。」

先ほどの「長男篤二の問題」にもどります。栄一と妻千代の間には、長女歌子に続いて次女琴子(明治3年)、長男篤二(明治5年)が誕生していました。先ほど一家団欒とか水入らずと書きましたが、それは一時的なことであり、栄一は日本の殖産興業のために昼夜を舍(お)かず働き続けることとなります。「渋沢家三代」では次のように表現してあります。

「そこには寝に帰るだけで、自らは早朝から夜ふけまで五層の楼閣(第一国立銀行)の二階に陣どって、合本主義、反独占資本、排閥のスローガンを呼号し続けた。」

犠牲になるのは家族です。妻の千代がコロナに感染して42歳で死去(明治15年)。その時長女の歌子は19歳、次女の琴子は12歳、長男の篤二は10歳でした。この時長女はすでに穂積陳重(のぶしげ)と結婚しており、やがて長男の篤二は穂積家で育てられることとなります。栄一は千代が亡くなった次の年には伊藤兼子と再婚しましたので、後妻との関係を案じての処置でした。その頃は栄一自身にも家族を顧みる余裕は全くなかったようです。その後明治21年に次女琴子は阪谷芳郎と結婚。

冷酷な現実ですが、天は、世のため人のために一所懸命頑張ったからと言って、すべてに味方してくれるわけではありません。家族の問題が一番難しいのかもしれない。渋沢家の跡取り息子、篤二が放蕩の世界に迷い込んでいくのです。親があまりに偉大であり、回りからの過剰な期待と干渉に押し潰されてしまったのかもしれない。熊本の第五高等学校を退学し、埼玉の栄一の実家で謹慎(明治25年、20歳)。こういう時親が打つ手は早く結婚させることです。明治25年には、16歳の橋本敦子と結婚。仕事も与えて渋沢家の御曹司(おんぞうし)としての自覚を促そうとします。

石井十次の少年音楽隊の演奏会が渋沢家で開かれたのは、ちょうどその頃でした。篤二夫婦2人で賛助会員になったということは、それなりの感動があったからでしょうが、残念ながら石井十次個人との出会いの機会とはならなかったようです。

石井十次と出会うことで放蕩の世界から抜け出した人物がいます。大原孫三郎です。大原が

19歳の時（明治32年）でした。やはりこの少年音楽隊の演奏を見て聞いたことが出会いのきっかけとなりました。大原は自ら岡山孤児院を訪問し、石井十次に面会することで、自分の運命を変えていきました。

栄一は一度だけ岡山孤児院を訪ねています。明治44年5月19日です。その設立にも自ら関わった、日本女子大学の拡張資金募集のため関西方面を遊説旅行したついでに立寄ったのです。残念ながら、この時も石井十次は九州出張中で、個人的に話をすることはできませんでした。岡山孤児院日誌には、「午前十時、男爵渋沢栄一氏、森村市左衛門氏、東京女子大学校長成瀬仁蔵の三氏来院せられ、渋沢森村両氏金百円を寄付」とだけ記されています。案内したのは、大原孫三郎等です。ちなみに、石井十次の長女友は、この次の年に東京女子大学を卒業しています。

この旅行から帰って、5月26日、当時の日刊紙「日本」が篤二のスクandalを伝えます。美人の妾（めかけ）と一緒に楽しげに芝居見物していたという内容です。また放蕩が始まったのです。何不自由なく育てたのに、親の期待・信頼を次々に裏切っていく行為に栄一は悩んだことでしょう。しかし、社会的地位が高くなればなるほど、本音は言えなくなります。彼が取った行動は、この長男篤二を「廃嫡」（勘当して財産を与えないこと）処分にするという厳しいものでした。このような時、自分の拠り所とする論語の言葉はどれなのでしょう。「意なく、必なく、固なく、我なし」か。

栄一は篤二の教育の反省からか、その後、私塾の「克己寮」を作り、思春期に入った武之助、正雄、秀雄等を他の優秀な学生3、4人と一緒に入寮させ集団生活をさせています。「克己」とは論語の「己（おのれ）に克（か）ちて礼に復（かえ）るを仁と為す」から来ています。しっかり自律（自己コントロール）のできる人間になれるという栄一の強い思いの詰まった言葉です。

石井十次は大正3年に亡くなりましたが、栄一はその追悼講演会（大正3年2月22日青年会館）で、次のように述べています。

「相知ることは親しくはございませぬけれ共、慈善救済と云ふ精神に於いて常に深く関係を持って居ました」。ほんとうは、もっともっと石井十次に近づきたかったのかもしれないと思っています。東京と岡山という距離がそうはさせませんでした。

最後に渋沢栄一が書いた「論語と算盤」の中から、子供のたちが自立において心得として持っておいてもよい言葉をここに拾い出しておきます。

「私の主義は誠意誠心、何事も誠を持って律するというより外、何物もないのである。」

「悪いことの習慣を多く持つものは悪人となり、良いことの習慣を多くつけている人は、善人となると言ったように、遂にはその人の人格にも関係して来るものである。ゆえに、何人もの平素心して良習慣を養うことは、人として世に処する上に大切なことであろう。」

「習慣も少年時代が最も大切で、一度習慣となったら、それは固有性となって終生変ることはないのみならず、幼少の頃から青年期を通じては、非常に習慣のつきやすい時である。それゆえに、この時期を外さず良習慣をつけ、それを個性とするようにしたいものである。」

「怠惰はどこまでも怠惰に終るものであつて、決して怠惰から好結果が生まれることは断じてない。」

「常に社会的恩誼（おんぎ）あると思ひ、徳義上の義務として社会に尽くすことを忘れてはならぬ。」

「余は青年に向かつて、ひたすら人格を修養せんことを勧める。」

「青年は良師に接して、自己の品格を陶冶（とうや）しなければならない。」